

2

シェイクスピアの危険ドラッグ

遠藤 花子

実践女子大学

近年の日本で騒がれている「危険ドラッグ」は多様化し、問題になっているが、社会が薬物と向き合う様子は、近年の日本に限られたことではない。「危険ドラッグ」という言葉は、厚生労働省が2014年7月22日に決定したことを発表した語であるが、薬物が人体に及ぼす影響と規制は世界各地で、またそれぞれの時代で深刻な問題となっている。

15世紀後半から16世紀のイギリスにおいても薬物による害とその取り締まりは課題となっていた。この時代、ヨーロッパ諸国やアジア諸国、更には新大陸との貿易が活発化し、香辛料を始め、多様な薬草や食料品がイギリスの市場に出回るようになった。特にロンドンには移民も多く、様々な人種の集まる一大商業都市であり、日々、新しい商品が出入りしていた。それゆえ、真新しい商品が人々の注目の的となり、イギリスにおいても危険な薬が散見されるようになったのである。また、医学関係書類の英語翻訳本の出版も加速され、読み書きのできる富裕層の間では、薬草や科学薬品への関心と認識が深まっていたが、体に悪影響を及ぼす薬物について当時のロンドンの人々はどれくらい認識していたのだろうか。実際に毒薬を服用する人の増加に伴い、毒殺に対する法律の施行も1530年ころから見受けられるようになった。16世紀末からロンドンで活躍したシェイクスピアの戯曲に次のような「危険ドラッグ」に関する語が見られ、この時代の薬物の文化が反映された興味深いものとなっている。

- ① マンドレーク／マンドラゴラ (mandrake/mandragora) マンドラゴラはマンドレークのラテン語名でなす科の有毒植物。主に地中海地方に自生する植物で、催吐や睡眠麻酔薬として使われていた。シェイクスピアが使用して以後、麻酔薬の代表としてみなされるようになった。
- ② トリカプト (aconitum) 毒薬の意味として使われていた。シェイクスピアの時代の薬物としては特別扱いされていた。強い毒薬というだけでなく、地獄の恐怖と結び付けて考えられていたこともあった。
- ③ 芥子 (poppy) 実際に英国で栽培が始まったのは1798年のことであるが、15世紀から知られていた。外部炎症の鎮痛剤で、長い間、歯痛や神経痛の治療薬として使われていた。芥子を最初にアヘンの意味で使ったのはシェイクスピアが最初だとされている。
- ④ 毒人参 (hemlock) ギリシア・ローマ時代にうるさい哲学者や王様を処刑するのに用いられていたことでも知られる毒人参であるが、古代ギリシアや中世アラビアの医学では、痛み止めを始めとし、さまざまな治療薬として使われていた。また、長年、鎮静剤や、痙攣止めとしても使用されてきた。
- ⑤ 狂気根 (insane root) 何を指して狂気根と言われているか定かではないが、睡眠と狂気を誘うペラドンナ、似たように狂気を誘発するヒヨス、更には④で述べた毒人参のどれを指しているか定かではないが、シェイクスピアの中では毒人参の意味で使われていると考えられている。
- ⑥ 毒麦 (darnel) 小麦畑に生える有毒な雑草のこと。地中海地方から穀物が輸入されていた頃に、混入されてイギリスへ入ってきたとされている。当時は普通に見られる雑草であったが、鎮痛性があると言われていた。シェイクスピアの中では毒薬の一つとして列挙されている。
- ⑦ ヘベノン (hebenon) シェイクスピアの作品の中では、耳に注がれる毒薬として毒殺に使われている。この時代の医学教育上、毒物は耳から体内に入ると信じられていた。